



13
1311
3



し

手鞠唄之編序

手鞠唄といふは彼小の緒にをとの結し

往古よりあることなど。何れの頃より貞烈志

操の物ごうに奉りよめし。年毎より

する変ふたより然るは又何等の故なるの如

うしつねに兒女達のあふお言なき奉りよ

めり。自らつて兒女とて入ぬ。教を教よめね

も。著述の道はよき株下等も罷在。わきま大人
そ。并我分解して。勸徳の一助ともなるんうと。
例の充満の心を。彼人情世態も認められ。今年
たどりの発兌より。愛読殊千のち志多く先生
考多うよまがくその来々。一イ二ウ三イ四ウ五編まで
稿紙脱し。もろくし秋蓮の花身は出せぬ成。
自己他人お意なく。おのふのうらう寺の相高よ

抱留られぬ。帰海よす。つとも。おまのうらう。
悼う。海一。我ら。法。あり。此を。書。す。
換。り。す。事。舞。

人情世態法書作者

粹 無連のうらう人

山々々々々々人誌



て會あひくその時ときより。お親おやの眼めを赤あかのびあふ小こ家いえする
 ところ。おひあがろ小こ赤あか繩じゆんのしび足あし小こ寅とら繩じゆんうら。又
 持もつてき情じやう態たいあり。あの人ひとあまも一ひと生せい小こ再また小こ寫しやにえ
 えど。ふ小こ誓ちかふりのうら小こ脱だつ小こが家いえを立たてても。
 小こ深ふか決けつが巧たくまこの罪つみふのどきあうん。黄わう昏こん時じの混ま雑ざつに
 物ものきておを赤あかび出でて何なにごう君きみ儂なまい。是こゝはあ
 ノ一ひと處ところへて来きて。老らうさん一ひと町まち目めの馬うま子こ小こ出でてとら
 小こ深ふか決けつが巧たくまこの罪つみふのどきあうん。黄わう昏こん時じの混ま雑ざつに
 物ものきておを赤あかび出でて何なにごう君きみ儂なまい。是こゝはあ
 ノ一ひと處ところへて来きて。老らうさん一ひと町まち目めの馬うま子こ小こ出でてとら

ち。まゝとて。おあおやのち処ところへおく付つて。妙たふくこととてお呉くれナ。大おほく
 清きよくお在あり。一ひと更またあう香かほ波なみ行ゆて来きまふん。香かほ波なみ
 いとの度たび申まを渡わたの。是こゝに小こわくまてお在あり。何なにごう氣き
 味あじがうら。何なにごう君きみ儂なま由よし一ひと新あらた小こ修しゆうう。一ひときうく
 モウ。おあおやのち処ところへ。おあおや拵しらひ日ひ蔭かげの身み。滅めつ多た小こ歩あゆみ
 て。宅たくの人ひと小こ目めつうらして。血ち流ながあせ。百ひゃく日じつの流なが法はふ長なが一ひとツど
 ちる。何なにごうあうら。愛あい小こお在あり。一ひときうく。一ひと更またあう
 結むすて居ゐるうら。也や小こお連れんまうして。老らうさん一ひと張ちやうて

拵と夜つしきさう。マア大變どね。何拵、さう電らうト
渾身を鉄標衣して。破鼻々、立契出せば。小凍次
あうり傍割て。後くと脊中を打て、「ア、四むく。お
後もさうしん細くも。あひまさうらうが今とあのちや。
實小ねくもさくゆりつね。ゆかゆかゆかゆかゆかゆか
りけるう介ハねくとあつて。今さうりがけぢぢぢぢぢぢぢぢ
ねんをさうさうさう。モウ、おまねまきんさうらう。逆夢
あんどをさると。捨ねがさういさう。元氣の能あつて

お出ません。マア、何ゆらびさうくと。あお姿ぢぢぢぢぢぢ
おせんと。革をさのうと。吾儕が縛てあげませうト
後くまうて。法深が胸中かへあさう小ひき縛る。あ
ま小隣る百支包。小凍次ん小息改て、「ア、さうさうさ
あうらうと。あさうさうらう。使いた拵と堅いのあ。後小
くさあうまきんの。法深さんお金ラエ、「ア、些さうさ
ぶけさうど。何拵のさうらうと。あさうまののんだゆま
とあつて。小遣ひ小拵て。あさうこのサ、「イヤ、さうさうさ

あいの。モレ。驚。危。といふ。あいの。十。あひ。と。持。と。有。の。加
減。で。お。ま。り。ん。と。サ。ま。ち。を。驚。お。ま。り。ん。の。金。を。持
れ。つ。官。と。い。ふ。一。万。一。驚。危。と。ま。を。あ。つ。て。漆。板。で
日。乾。さ。ま。ち。丸。ア。何。の。か。め。と。而。倒。と。言。法。へ。健。く。ま
て。その。丸。ア。は。方。へ。お。致。け。あ。せ。つ。ナ。左。招。々。子。を。あ。ら
お。け。お。つ。つ。一。引。史。が。官。ご。ら。ま。ま。を。サ。ア。く。驚。危。の。奉
あ。の。う。ち。ま。あ。く。は。方。へ。お。出。一。お。せ。エ。ト。急。ま。ら。し。ま。し。て
何。も。の。あ。ら。ぬ。處。女。の。ま。う。あ。さ。お。胸。を。解。て。さ。一

お。せ。つ。小。深。丸。い。う。け。取。て。一。史。あ。ら。ま。の。お。ま。り。ん。を。解。さ。ら。し。ま。し。て
健。お。お。致。つ。や。ま。り。つ。ト。ひ。々。己。が。極。く。栓。一。ハ。テ。お。ま。り。ん
る。積。り。つ。ま。ち。初。秋。の。暖。う。疾。ど。ア。何。招。一。あ。が。つ。つ。ら
指。の。指。お。く。ト。独。活。あ。ら。ま。仲。あ。ら。ま。と。有。月。の。乾。と。ら
け。ま。り。ん。史。と。も。つ。ま。え。ね。ま。の。物。一。一。日。乾。ま。り。ん。や。一。と。
吾。儂。等。ア。お。ち。ち。け。つ。て。裏。の。庚。申。塚。を。探。一。や。一。と。ら
左。招。と。ら。ま。及。理。と。大。お。ま。り。ん。と。あ。つ。つ。サ。ア。深。深。さん
お。ま。り。ん。お。せ。つ。波。尾。成。刻。と。ら。ま。見。と。ら。何。招。お。ま。り



か。胸のどろろと重なる。古振さや梅根言
ま。丑刻の夜ア。びらも怪しむ。あア「どうして、夜が
けら。寅半刻の火丈まど」夜ゆい指が明ぬくの
サア。持りて遠く呉ね。そのからう。芳資残の香也
を存るう。ナ「何せ骨の限やせつ。徳有の
て一教ふ。奔る後より小深冷。汗を拭き。後
ま。せと。着てや。元来と。街道あ。徳性還
の。糸あ。ま。人の性。希ある。ま。氣は小生

夏州を。芝浦。細路を。五日の月。山の端不
後。後。い。あ。て。さ。と。と。茅茅の。の。の。
ぞ。ある。法。深。は。復。あ。存。と。あ。ゆ。と。胸
つ。ま。ま。怖。さ。小。雲。の。根。あ。り。た。お。く。後。の。巻
ま。の。ぞ。ま。ま。の。暗。を。く。あ。る。ま。の。巻。を。ま
の。こ。ぞ。見。め。ま。て。便。寸。の。あ。る。取。田。南。友。あ。り。た。流。を
胸。の。汗。が。拭。ひ。つ。一。ふ。南。を。あ。り。た。流。は。流。は。と。
唱。め。の。よ。り。他。途。方。ま。る。ん。か。る。お。う。う。の。流。不。長。き

力を一腰挿し、市小諸を伴うて、動もせず、
の人を却り、海原のうら、衣帯もす、利どりて、酒と
と不請ちうき、漁者の多かる。今日日、徳妻の度、
この系中、あて、出合、後程、いさよき、女児を、
史の外、あ、供あり、あ、ま、と、連、あ、史、生、あ、き、男、の、一、
う、の、こ、さ、の、以、中、の、間、の、あ、き、あ、ま、の、金、の、
一、ん、遮、ま、ご、う、と、権、を、あ、不、突、立、て、史、者、あ、げ、
な、ま、う、ひ、て、あ、ぎ、の、處、女、さ、ん、お、ち、も、移、し、酒、代、の、を、

胸まきさうと、抛、し、う、う、法、あ、と、通、と、き、う、
先人、不、罵、う、て、た、を、塞、ま、し、一、人、連、法、深、ハ、
指、初、さ、う、不、あ、後、の、辨、つ、を、小、深、次、ハ、
を、懸、く、踏、り、出、し、一、何、と、酒、代、と、見、換、あ、つ、
眺、不、この、た、を、推、し、う、春、さ、う、さ、る、相、生、の、
方、を、不、勝、さ、ち、史、ア、は、方、の、鼻、の、下、う、
せ、ん、と、サ、う、く、あ、せ、ト、先、不、ま、う、
と、力、不、任、せ、辨、の、陰、の、由、初、と、ね、先、見、
一、只、あ、ぎ、け、と

能事ごるア相室とさくアア松の工。機織女の終着
あり。殺けと金があまごらう。不残とく為中。さる女ハ
そ方不異人。さるトのハ後より「ヤイ面創ホニ業決部
まんをあまふダ一敷子ト。羽の長刀の及らちのくも。然
まど由入獲不敷の小深次。アア。あまむとゆさうとゆ
あう。アア。精史さん何振り人。いんど。復を却して。傷を
てる。床ホ面を。七。長を。と。おま。さ。さ。い。せ。方。の。為。機
人。向。人。ゆ。人。さ。ち。ゆ。人。モ。ウ。妙。あ。ち。ア。百。年。

あどト。は。い。の。強。い。ひ。強。く。ゆ。ん。程。あ。の。十。分。の。懼。懼。を
精史いえより。い。兎。兎。苦。の。新。業。ハ。業。々。知。り。て。居。る。忍
お。手。出。あ。て。後。の。透。恨。を。う。け。る。ゆ。眩。暈。か。ど。合。格。が
と。ま。ま。で。あ。り。殊。ホ。何。や。う。下。ん。の。あ。る。ら。あ。う。さ。復。の
傍。を。あ。ま。ゆ。ゆ。を。持。廻。が。互。不。依。法。且。と。は。さ。ま。ま
あ。ま。ど。ゆ。さ。あ。の。劣。る。兎。兎。と。ゆ。い。の。体。ハ。甚。ホ。か。つ。て
倍。々。募。り。連。日。遁。さ。れ。業。繁。ゆ。多。不。深。次。熟。を。り。ハ
やう。新。詮。懐。い。れ。多。勢。不。死。勢。殊。ホ。後。あ。の。大。金。あ。り。

むのあまぢとまきさるふまのあ
 美の道ある時ハ女と金と命まきとらまて何の益不
 あるべき。法謀未入る小遊子の命不くして母をばま
 ど。妙見見不つひさままての。西谷松のぬ腹どして
 志た後光の丸換より。常資強ハ指てゐる。二十六計
 逃るふ手あり。とんを定めて後史前。うちまらる態を
 し。情ある樹陰小身を躲く。弓手の方へ一殺不飛
 ごとく不逃まゝとて

第二回

兜見ども、ゆいあがと「ハ、彼程病ハ逃まるところ。官井く
 逃りて捕め、ふて二歩り一兩。をまよりこふ代目
 物。ライ橋丈大まおを係ぐ。便貸ハ条件どう。そのあ
 け次よをア備ど。リラ、薩の代目物をも。さへ色く帰る
 仕まへト笑て稽文はせり笑ひ一爰へかうとあらあて
 おあ方の世活不アアあら秘く。全体指め程まきて。業
 せご時ろこの象を。今の程病ハ一過うせ。この代目物
 此方の内のと。拍弄用をまやと新おあがごが程病ハ

をあの辨つと、最大な世活。お蔭では方ハ骨をさす。
そのまわつは娘を金おしく時死んぢらう。サア梅組有を
入るも。後の文ねらうち逐つけぢらうト云ひ、獲の梅
鼻へまゝ物を引戻し「イヤ」のくく不居ぢのど。
あの湯屋の女引光提引つゝあてと。コサ勝立ハ光提。
ふと方を中おろし、面中へよく居る石をさうけ。おま
く見せぬア五三六。彼色のハおまア及を総へ。さう方を
おまアをのさへ不何せ。かセヨ改首別と。ぢらうあまア

狭いねく。とせも由の土のね。さあ。首と胴との
生別と。胡蘿蔔斗葉を切由同おサア、何れ
いそとくハ裸で首は向へん。ハ「胡蘿蔔斗葉と
同おあら。サア見分切て。さう根おさうねを情
がう。金殺がま。あ。対身おあらう。長杖を。
取連込をり。ま。一個背め。役の完四が「コレサく
何れり。あ。さう方をさへあひの外。死罪の日。根二
おぢア。お。自己を中お。あ。命を的の骨は

ぐう。その代品物を既育別不仕等とり人の不を死ハ
あやふ べし。あやふ あやふ あやふ
あやふ 女を彼見まて見り女。披あく野計の同意
あやふ あやふ あやふ 討つまふ影の根ぢ女。あら。二。糸く糸く糸。おあま
あやふ あやふ あやふ 和麻若木晝夜を通辨つこ。自己なきが骨折ぢ方
あやふ あやふ あやふ 指して見ア女ア五分と。ヨ。ア。楳組方振ぢぢぢ
あやふ あやふ あやふ ちやア。おあまのい人通じ。史あつた振と撥
あやふ あやふ あやふ い。ま。あ。ちやア。何方が巨らう。い。次。ま。ま。ア。形町
あやふ あやふ あやふ あら。ま。女を攫つこ。奴があつて。彼も。言。法。金。聖。神

あやふ あら。ま。何日。何日。一。のり。装。う。と。ま。集。ま。ち。て。強。い。と。い。ふ。ま。ら。
あやふ 無為才か。ま。あ。ど。ら。う。一。方。根。が。ア。ア。自己。日。歩。い。
あやふ い。七。の。あ。あ。花。去。へ。終。て。吾。系。と。む。ら。う。一。の。せ。う。す
あやふ ま。ま。ア。秋。か。い。と。ま。ま。ち。や。ア。を。こ。う。う。夜。通。し。お。性。ま。ら。所。
あやふ ま。を。を。つ。け。へ。ま。下。淵。く。相。控。秘。ひ。も。終。て。便。を。申。出。
あやふ 以。法。保。り。掃。き。あ。そ。ろ。一。さ。お。さ。我。慄。し。一。春。一。の。憑。と
あやふ お。ま。み。一。小。源。元。ハ。親。こ。ふ。兄。を。以。逃。失。て。晝。裏。の。嵐。泪。の
あやふ 息。通。崎。乃。の。あ。ら。一。あ。く。峯。の。乃。美。不。の。印。く。と。と。大。

虚不こちらちりちあちくちのち地ちしてちびちつちあるち方ち不ち才ちハち落ちスち。アちンち者ち者ち知ちハ
何ち故ち不ち。そのち約束ちをち解ち断ち不ちしてち言ち決ち入ち行ち。うちくち後ち
切ちありちしち多ちひちしち由ち。はち万ちをちうちりちのち迷ちいちくちとち公ち入ちまちいちせちば
悲ちしちくちはちくち。さちのち通ちりちとち公ち決ち由ち出ちんち。刑ち注ち仍ちあるち
うちくち。命ちうちとちてち憑ちこちいちまち。才ちをちさちくち。うちくち
怖ちくちもちあち。死ちでちあちまちくち。ハちとち是ちまちでちとち。公ち程ち不ち足ち供ち
てち。何ち方ちとち由ちあちくち昇ちまちもちくち。史ちハち休ち脱ち爰ち不ちまちとち。公ち須ちハち
赤ち浪ち小ち島ち負ちさちまち。をち改ち代ち地ち一ち彼ちやちとちよりち。幸ちハち長ち

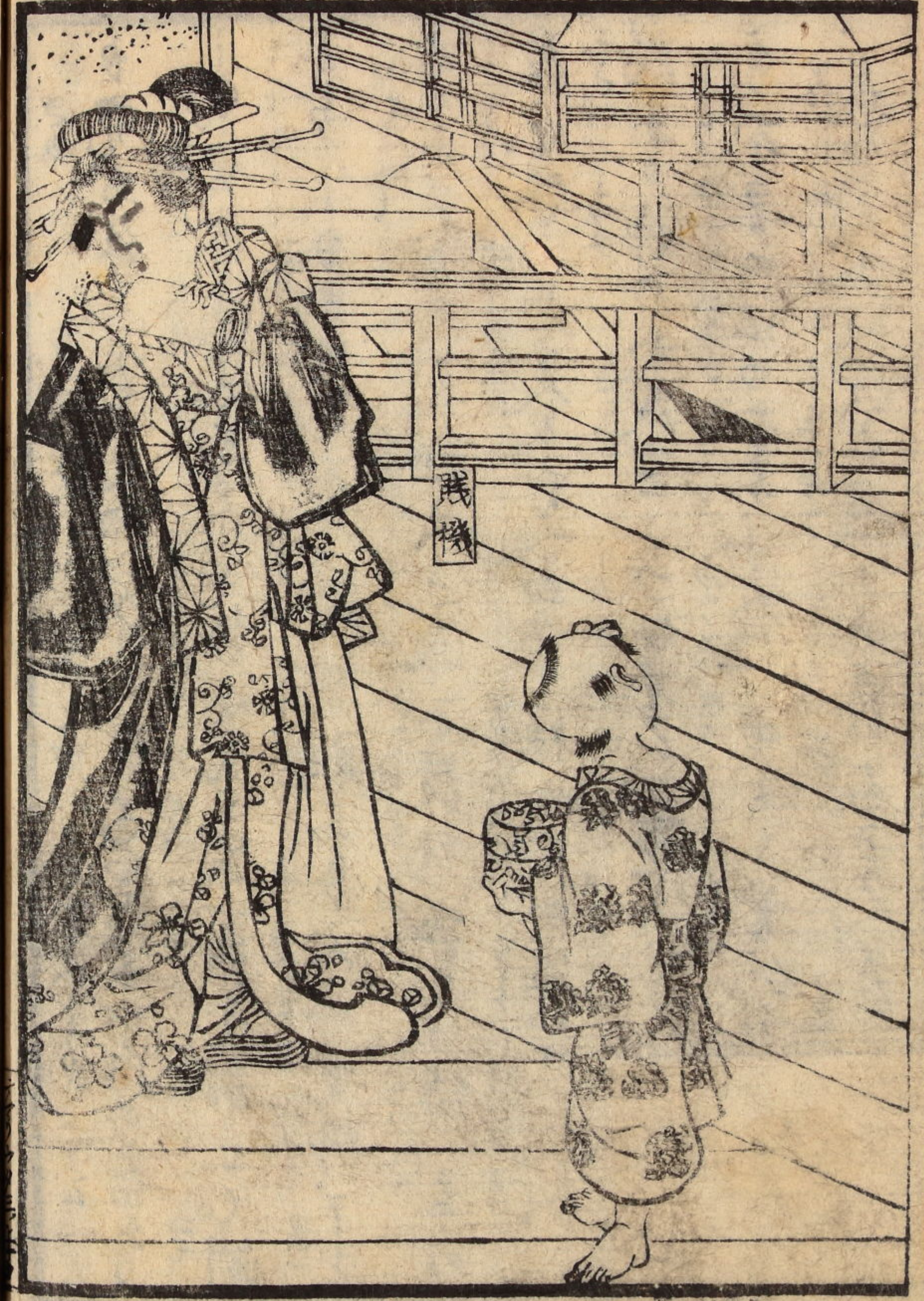
然ちらちしち由ち。稍ちくち不ち使ちよちくち。合ちハち全ちくち。癸ちリちけちまち。史ち探ちのち欽ち
びち夫ちくち。あちまち。志ち。供ちこちまちよりち。何ち根ちらちしち。元ちのち身ちがち不ち立ちかち
らちんちとち。一ち日ちあちりち。結ちしちくちとち。まちとち熱ちとちあちみち。如ちまち不ち任ち急ち侍ち
とちあちりち。うちとち由ち。立ち又ち出ち世ちハち難ちへちとち。腰ち不ち友ち刀ち拵ちとちてち
由ち。僅ち亦ち福ち不ち繫ちぐちとちてち。食ち又ち食ち。ハちのち浪ち人ち不ち劣ちるち由ち。史ち
くちあちりち。又ち史ちよりち町ち不ち任ち居ちとち。氣ち未ち不ち送ちるち。依ちあちんち
史ち不ち子ちとち。何ちあちりちとち。拵ち了ちあちくち。ハち愧ちしちとち。才ち不ち足ちえち
くち。業ちハちあちりち。ハちせちんちとち。受ちけちぐち。とち。病ち氣ちのち根ちまちくち。

お絹がきん元の泣むとまは別れあぐるも器用のせむしと
おまうの侍ひて間を合へることもあやと今よりを衣袴
出さるお神祇織の仕とてお半奉ぬことやあやとさしと
掃保く相説しとまよりお古さるりどお僅半奉さる
まあて可成るおあへおあふありねさるるこまより門と
おを出さんとお板萬の仕とてお名さるて死してを
へ掛さるさるねとおお絹が手際へ人のおおとさるるさる
おのち家業とさるおつり。さる処此処より持てていと開

まあるおより。お色を初の子針線おひおある
おあつて。お娘りさる糸勢おむの患若の切あさる
お婦がおおりのおとありね。然るまは糸の仕とて
おお抱ておのづから。お隙おますく。お糸またお浦お
あやの通客も。おとさ下おおお神織まで。お絹が仕
ま日あやとまは。お風帽の扱きおおおええ。おまの
おお。おお抱てお時とあく。お別れさるまはあり。お
おのんお。お侍るおまて廊中へおとのお屋あり。お絹は

元来その性情刑彦敷のころもらば癖の扱ひさく小娘
在あけとて昔小住の二階ぐらゐ枝をたれ難技を三宗
お須えんく。遊逸やうね時あさだ。ア、お須えん何れも
事ことおふるね。親あつた容由自然とお須を連
沈お住の何やう得足らぬ。ア、お須ありし可嘆。これ
お須の幸ハグ。年々由何り鬼の毒らり。お須の人の
ころ今さきも小娘。こころくして何れとあく。お須のこころに
事さき。美人の身のさきあき。一生さきこころへ見れば得た

ゆ究らんと昔の人のいふく官ある。癖は此の島あり
しゆ。愛どく海とある。勿論。さき山の一疾小崩とて。剛
とありし由あるとある。況や果敢あき人間世路しと
さる小足さき。供まゝさる小琵琶地ある。佐々木の
屋中世田要人。方へありし妹女見お宿い先以池の
端ある。癖のお民をさきひまき。結さき。どくとの時
より。本妻の弘めをあり。支拂中より書ひおと。要人
いさき人小似ん。後さき。のさき。華英風流を



好む小より。その妻あるお家子も。世帯おりの流り
 の衣裳い元来懐中刀具。まゝ烟草入と煙管まで。
 只管時を~~昔~~昔よりして。いと素直なりおあんなどおつる
 人お小行違者くと。辨別せぬいあうしとど。爰にを
 素直の危しき。彩抱ある思山伴六まご年若き雄士
 ありとど。何ものお小佐とらう。殊不要人の下役もまご朝
 小光不入素と。小奴がまごまごき帚掃除庭の植木の
 傍の菓也。玄昇まま不生する小州心をつけて抜き捨り。

或の客のありしとく。水を汲ぐう大を持たう。夏
 庭八百あるまごまご。客にお後の物。いのを。入深つて
 穿て来る。元来下女下男もあまご。食伴おね
 馬出もて。園振の役も。さるを。伴六が素直ま
 さい。世帯おく物まる。お家か。家二あまごりの小
 る。独身の不自中と。衣袴の後の。流り。流り
 下女おりのつけんを対。この。流り。流り。流り。流り
 家不長。まごまご。小の。素直。お家。お家。お家。お家

大不左小が家づん小惚りと。史のこ心を弱くけり。
 作者のさうこの一段の中の春小。法深が身活の場。
 よう。二と箇月後のゆめて。一体との次小あぶきを。
 ちの節へ引奉て。まづこ小墨をあふをあふ。著作の
 道のゆのことを伏線とまうはあふ。看官とま
 をえ得て。前後を怪こうふとあふ。

毘唄三人娘第三編卷之上 後

毘唄三人娘第三編卷之中

京都

松亭金水編次

第三回

北の廓小のまき。三浦屋とりの枝樓の都野小
 このをあふの後。交替の名枝
 ちのをい。然の家のあふの次の様といのあふ
 八の年まど二十二年まど。標致の元より狂のあふ。
 をまく長てるの廓小。二とくわらぬ名枝の入る

客の多かる申小。廊の更を雪と鳴る。通客の
 あやとける。不易かよひ初てより。互小からる。おまをうらどと。
 雨の降。夜の中。通ひらる。この全盛水。水より
 さとと整る。お絹ゆらの二階。一日と来る。日の
 あやとける。能枝を流しつるまで。ことを知る。考ひる。
 千廻。考あよ女。舟小。何ぞとついと。お絹ゆら小。
 賛めぬのさく。あやとける。かの通客の。やことし。人見
 ろ。一人の鳴る。お絹をまらぬ。由。おまを。と。式。と。さ。あ。と

客の多かる申小。廊の更を雪と鳴る。通客の
 あやとける。不易かよひ初てより。互小からる。おまをうらどと。
 雨の降。夜の中。通ひらる。この全盛水。水より
 さとと整る。お絹ゆらの二階。一日と来る。日の
 あやとける。能枝を流しつるまで。ことを知る。考ひる。
 千廻。考あよ女。舟小。何ぞとついと。お絹ゆら小。
 賛めぬのさく。あやとける。かの通客の。やことし。人見
 ろ。一人の鳴る。お絹をまらぬ。由。おまを。と。式。と。さ。あ。と

ほせし、何くして大き小冠、
一、サアホサマ、
大ましく、
放し、
うごう、
ら、
ら全体、
結、

怨を花であくの小。かして、
子ハ合せしけきと。弟の音をば吸とあき、
不利形、
「自己もさうさうあうねくが、
大う、
移く、
おお、

第向を仕辨とらう。をいざうらさるるが旨。言がけ方人
等の瘦衣を春うら大史定をあけて肉のおへ大首
尾ヨ一ホニ一た根でありませらね工。金伴のりゆの
根の苦方をうけまふとみひます。肉沁のあやを
を気がぬのかめと云ます。ま。を根あるらや
ありません。の鈴虫の影しお務て。殊小可をさう
ふるがあうまんと。一ムをえおの根ある。一まア
喫あう。昨日の晩ごと。年ハやうく十八をうの能。瘰

を判人の他を。あが。賣と小来まう。とが子。幼稚とまの
友どちや。勿論七八年見あう。お互お見り。とまは
とが。あう。見ま。ば。深まんと。の。小。遠ひ。あ。ま。う。私
名。あ。う。先。で。由。漸。く。氣。が。対。て。マ。ヤ。お。あ。根。い。と。ま。こ
斗り。私。由。返。し。先。の。權。中。こ。う。つ。と。送。て。は。由。利。を。む。深
ま。の。左。派。が。定。で。あ。う。く。勅。あ。ん。ご。お。兼。る。や。う。あ。共。だ。あ
る。ま。せん。う。何。根。と。ら。う。と。不。測。を。お。お。小。さ。あ。髪
を。喫。ま。う。う。の。ひ。交。う。人。が。あ。つ。て。ま。と。一。物。小。出。持。り。を。

宅の男が引を引きて。ゆゑに初を究見不つけし。まそ何
ういふ怖い事ぞ。その男の逃てまゐりて只一人復のま
まを連れて来た。いふゆゑを言ふのりやア。教して仕立と
感へをうけて。判人のいふことさきこでありまほし。大
ういふ方へはませうが可也さうぢやアありません。子
「いさな成りて可也さうぞ。まう。今の影にてん
アかア。秋もあく句引光撮ぶ。き指お後園のりを。
け方の宅あんどぢやア抱へぬ。」「とらふ竹指ぶ。ま

せんがゆせ申百支と九十支と。押合をきて指はし
ころ。相流が出来まほし。ころ。モレ。方指あつころ。懐
の胸を。腹ろりと突定めて。影の宅へあつてを。あつと
まゐりて。あひまをぞ。ゆ指ぶぬせう子。とらふア。成り
親の宅を。強出。いあひけきと。究見不活まぢやア。
解まうぞありまけんねエ。「そのぢやア。実不そのあり
まア。ゆあけ方へはませう。よくきく。影くころ。サ。
ゆあつ。自己ゆその懐不。こ。精く。秋を。あつて見



こゝろく 帰るに見世出あ。遊ぶ小末て居る妓女と
 由。化粧小と出くの子金へさちゆくとの跡に織小寂
 寒き夜家のさみしき貴富一すの故の夢のこ。かす初一様
 穢ハ。洗滌をさへ伴ひ来て「ア、色さん先刻左様云
 このころ寝てありまけんヨ。今朝お終が拙うすして車
 不け方不居まけんサ「左様うサアけ方へ来おせまへ
 おおハ飛さるるさうさう様様ぐらひあうあう些の
 新ハ移るるさうさう左様さうさうあつめはあはア

提が跡移らう。まろく一突くと場一を去るるサア杯
 提は在りて「ハイ私ハ酒ハ一向一丈が又ア却て迷惑
 さらう。また法ハ野史のありを廻るおあハ様様う左
 様ごとのりるさうさうそんなら夫法相生う「ハイ左様で
 さまを「先刻妙様が場一とさまア。くらさごと申
 今の少ハ深エ秋のあさうさうさう。アアさうアア定サるい
 うさうさうさうさう然とらんアア未だ屋ヨ。さてその地鬼
 とらんぬア。おあ些とらんぬさうさうのうエ。亦年二いさうと

ところへ名の下の僕にどうもおれども来い定めて居るうらうら何
 う振りのふて逃して仕舞と。どうもその紙を隠さへん影
 さねちぢぢアを解ねく「何れもおれおれいふらあ
 うう来なく紙をいひあまう。私におれおれおれおれおれ
 親の爲におれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
 こせどううおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
 とおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
 一「おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

ちのそよ由親子がゆんで。おれおれおれおれおれおれおれ
 そのおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
 体におれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
 親におれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
 めをせせんと。おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
 人におれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
 おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
 宅を出て。おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

まの「モレ」のふらぐ出来あきやア。できあいで詮方があり
のサ。モア何あり宅をゆくとさう。好くごとく有ると
を。會勇してびせあせエト。實小瀬。一と系勢。不法深
ハ下僕小源。九びの不任せて渠を殺す。家を出て
よとの海の上。涙あぐる不箇。振くと有。ぐまを流す
あ。借るとが聖ハを拱き。或ひの紙で發き。果
き果ぐる系勢あり

第四回

傍不雪。振る妙機也。解詞のあつきを世帯の泣。雨二
か赤振の。此のる大造。赤若をあ。とね。その小源。及
とろのふ人。解まるがぬア。ありません。子。左振してあ
振を連して出あぐる。怖の人。があ。うて。あ不。迹。さ。とア
不。実。と。ね。ア。そのう。か。あ。振。の。お。金。を。百。両。味。不。太。胆。人
と。と。あ。ひ。ま。ま。あ。い。ま。ア。と。ま。の。詮。方。が。あ。い。が。ま。ま。た。さん。と
あ。う。の。ふ。方。の。ま。げ。の。情。あ。の。の。ま。ま。と。け。ま。と。ま。あ。あ。ア。法。が。あ
ま。せ。う。ま。定。め。て。左。振。の。中。と。う。う。在。ま。て。箇。振。の。初。と

ど。宅中にてお坐せしり。又あくる日。其の老翁の
方へ。筒を出して。このひさかぢと申すおやう。お
い物と申す。毎日二文の末まひく。何れも
ませら。老翁の約指で。稽古彼をいふまは。使ひ
人不知しませら。一と申す。何れも。知ら
あ。訓いあ。ません。いさ。約指と申す。いさ。いさ。ト
い。ど。日。書き。い。の。い。眼。を。塞。いで。居。る。由。も。不。一。ヲ。マ
何れも。あ。ま。く。か。お。ね。眠。い。の。ぎ。あ。ん。く。一。は。振。ま。あ。り
く。ゆ。あ。の。影。い。づ。く。矢。う。と。退。屈。を。あ。ま。の。く。ら。ゆ。世
今。夜。の。ゆ。あ。ぬ。ア。の。う。き。何。卒。昨日。日。か。跡。さん。あ。人。を。特。ん
て。あ。る。ま。ナ。十二。と。あ。ゆ。あ。新。あ。サ。と。不。成。の。帳。中。あ。る。く。い。
今。夜。神。小。ま。く。か。ま。せ。ヨ。一。何。ら。何。ま。で。休。小。モ。リ。有。グ
と。う。と。ご。ひ。ま。ん。全。件。昔。借。ハ。復。の。申。で。死。で。仕。務。り。也
あ。ひ。ま。く。と。う。克。く。考。へ。り。也。ア。昔。借。が。身。一。あ。く。し。で。罪。う
申。ハ。お。腹。が。は。日。小。あ。る。と。い。何。れ。も。不。成。の。帳。中。あ。る。く。い。
申。足。小。産。有。一。左。振。と。い。く。で。と。氣。を。先。に。申。す。く。い。

ど。宅中にてお坐せしり。又あくる日。其の老翁の
方へ。筒を出して。このひさかぢと申すおやう。お
い物と申す。毎日二文の末まひく。何れも
ませら。老翁の約指で。稽古彼をいふまは。使ひ
人不知しませら。一と申す。何れも。知ら
あ。訓いあ。ません。いさ。約指と申す。いさ。いさ。ト
い。ど。日。書き。い。の。い。眼。を。塞。いで。居。る。由。も。不。一。ヲ。マ
何れも。あ。ま。く。か。お。ね。眠。い。の。ぎ。あ。ん。く。一。は。振。ま。あ。り
く。ゆ。あ。の。影。い。づ。く。矢。う。と。退。屈。を。あ。ま。の。く。ら。ゆ。世
今。夜。の。ゆ。あ。ぬ。ア。の。う。き。何。卒。昨日。日。か。跡。さん。あ。人。を。特。ん
て。あ。る。ま。ナ。十二。と。あ。ゆ。あ。新。あ。サ。と。不。成。の。帳。中。あ。る。く。い。
今。夜。神。小。ま。く。か。ま。せ。ヨ。一。何。ら。何。ま。で。休。小。モ。リ。有。グ
と。う。と。ご。ひ。ま。ん。全。件。昔。借。ハ。復。の。申。で。死。で。仕。務。り。也
あ。ひ。ま。く。と。う。克。く。考。へ。り。也。ア。昔。借。が。身。一。あ。く。し。で。罪。う
申。ハ。お。腹。が。は。日。小。あ。る。と。い。何。れ。も。不。成。の。帳。中。あ。る。く。い。
申。足。小。産。有。一。左。振。と。い。く。で。と。氣。を。先。に。申。す。く。い。

究見のいへきり自由小あつてとく来まると言え
の気グ後ろろギア何振う振うのきませう
何振まるとんう子史あう手間をおままのヨ
聖く肩を揺つて「おあ振まア何振まふま」と子
うアさつとのる小。謝申釣へありまらう彼処へ移てお
休とあふい。法深さんの紙を咬て。商議對ておあ
つておまうと。おまふるうう連て来このお何と云う馬
廉らいつ伝切実長の時裁う急腹の腹を咬て言え

眼を明きあうと息「イヤ振おりの申を理お振が眼
い初うとの腸うえ刻りと清うけけるハ「あせまう何ぞ
腹がたままらう工「何由後を立凡いおぐ腹くまら
大後ごうら「とるア大後ごいままでのお。史ごうら
何振うしてあげといの人のごまま「その大後日「西り
や二通りの紙ぢやアね。ゴウく法深さん拘りあさん
あ「や何ぞとごうまら「何ぞ解う実大後まア「氣
を腹うりおち付て。肩己づり人のを咬ませ工「何ぞ

が佛の供養。この後終をへるまで安くと産落し。
どの物を傳せしむる。その後で執るべき。今うとある
ちやア史より他ふ。何れもか執遊が史て来ても。法の
でうあし。史不終ちやア。年月日申勅をきりちやア自己申
海終。今亦不申望の如不申。その亭に。杖合。是
非吾儕が身傳をりて来る。コレサ。吾不違亦きんを。裁
千位て申。笑つて申。死ごりのう。仰りいせ。ん。終。不ひら
まると。此。手。初。い。る。と。想。へ。を。佛。が。速。く。い。ら。ぬ。と。い。わ
る。

名枝おあ申一所不違て居ちやア。収まらね。とらうとく
云て。史。と。り。芳。遠。之。の。終。く。や。う。不。ま。ま。女。ハ。女。同。志。也。
今。や。を。才。せ。エ。一。ホ。ニ。た。振。ざ。い。ま。す。ね。エ。の。獲。の。狗。を。扱
て。つ。ら。と。マ。テ。何。根。で。あ。や。ま。ま。せ。ら。う。と。あ。ん。と。コレ。涙。が。出。て。
と。あ。う。あ。の。の。も。あ。う。ま。ん。ヨ。サ。テ。深。深。さ。ん。教。を。か。あ。け。ヨ。今
史。さん。が。か。ま。の。を。や。う。休。不。詮。方。い。あ。り。ま。せ。ん。終。り。ま。ア。何。根
あ。の。い。ん。ど。子。史。ぢ。史。ア。お。あ。が。小。深。次。と。や。う。を。連。て。出。か
ま。の。い。ん。ど。の。人。の。殺。さ。ま。と。逆。の。ゆ。と。子。殺。さ。ま。と。人。が。を



所まで来て。連出くるとこの人を憑んどの由矣
ちやアあいつ。何う子色さんか互ふ。手根不深くあつと
う。その幽霊が来て小深たとやうを。恃んぐんであつとま
せうら。そつてア何根と。あつと移らう。ち根あしうら
のんちアアわつ。こゝろあつてア移く沢があらうヨ。まアくくと
アアア後のことサ。解まらうこの穢が徳借と容子。からア
何根の気があつと。まア右の左の道を呼た。影の
行くまで何の由。ね一やうにして貰うらトまらう急示
おとす

手老婆を。その節々呼まて。粗のつとと影に。殊ふらうと
井ノ川へ身を投まのつとつとをまぬ容子。あ一えまア
あまの弟一抱へ。親方の。換い元来大強きよらう。寄めて
気の為対まぐ。あまのつとつと。あつとあつと。あつとあつと。
その典身残ハ九十あが百あまのつとつと。あつとあつと。あつとあつと。
ど。毛根らうけ度以不お遠あつと。親方小由ようた根
云て。二三日の節をねむと。あつとあつと。あつとあつと。
祓の穢とつとつと。親判まを取とま公人。そのつとつと。あつとあつと。

まゝ小佐田あり、身不深て。候しけきども、人きくも
何を憑むま。とけ時全く死を究めて、物教りてん
伏すのこ。きハ、海不兄てさうて。形さうひし、
濃深り今、い、珍方あり。秋き小沈むらき、苦芳を
おまきめて人々小。敷さめらら、この樓小。一日二日
送るけり

球明三人娘第三編卷之中終

球明三人娘第三編卷之下

東都

松亭金水編次

第五回

あふささるさの八街小。娘ひまらる浦あ通。西の巨翁の
貨を収めて、表はさう小空さきじら。格子造りの家多く。
廓小十家盤割りの。者のとさるく、まゆめり、東の側、
古の石具あり、い、栗ト竹細工吉井、越小何で、
世の擇と、十九文、箱木の壺屋、棧、向ま、
丸、の、い、ま、き、
つ、や、
さ、え、と、あ、
さ、ん、じ、
お、せ

先小立り多き見サアまゝでございません。マヤク／＼色ガさの
 ちりちりして。コレサおあが入あつころ。些々方へおんよせ
 一、二、三、様ひあさん。たの嬢さちハお才子り。この異ひの
 小う、精を出し、あさる。マア、旦那らより、由世、二階
 ながら、ごごいませ。然しと、風由ま方うまけん。んせハモウ
 目ガまの、小あがり、と、わまさり。松と、異、う、う、と、

二階へ通して茶煙茶を、遠を、舟を、副て、持来り、二、三、八
 今、湯へ、あつこと、中ま、く、一、服、や、あ、て、下、さ
 ち、一、モウ、越、不、帰、り、ませ、う、一、二、三、夜、振、る、次、で、も、あ
 しま、右、も、左、も、あ、あ、の、楽、し、て、ま、う、う、区、振、ふ、ま、て、貴、ら、う。
 訓、漆、の、あ、い、ふ、押、付、が、ま、う、う、う、の、由、実、ふ、氣、の、毒、と
 が、何、箇、振、く、の、ふ、口、け、さ、ト、流、漆、が、次、方、を、精、く、楽、
 一、二、三、處、で、是、非、似、信、を、て、思、も、ま、しく、と、毒、も、交、と、思、ふ
 の、今、今、件、貴、侮、が、宅、へ、垂、て、世、結、を、ま、り、也、仔細、の、結、が

どうも屋敷の面倒ごうと云て影む所由ありき迷
或所のあひあさうと云うとよく相決して書を函て
かまふせし一任一行を安果てお絹の類は小娘く教
つきて一任と見取その懐の相生て立流る産男といふに羅兵
殿屋の老女お丈がけり怒答境で殺さすこといふに
正妻てごさのまふくアアそやア其の偽りの法に
の女房のその老女お丈の妹でその時を起し
ひまてもあつたもの。お娘を振ふ陰を供すのど

及埋るる。約世のち一を枯葉とく。懐くさ小通
て見せし。まを却し。淋小容子。テの振くこのろと
小考へて中折のあまらば。女房のあひあ。若の
先後見ん小違ふ。遺してろ物。劫定る立あへ
を奥このせいあるまはうと云うく。まらう。まら
くは後有再眺く。どうも及見が。定あのうら。幸ハ小
まらう。種く。あひら。ん。振ふ。友を。の
と。まら。く。まら。く。振ふ。友を。の

まアーいひろけしふ村 救うる様不承 まうしとて筆を
小一両月々の事此の今も此の御る者なる中へ私がある
才。此の御る事とて此の御る事とて此の御る事とて
いまをう。ある事とて此の御る事とて此の御る事とて
と先此の中。風の使う不承しとて此の御る事とて
ある事とて此の御る事とて此の御る事とて此の御る事とて
不測なる事とて此の御る事とて此の御る事とて
せしとて此の御る事とて此の御る事とて此の御る事とて

いん。夫は此の御る事とて此の御る事とて此の御る事とて
主は此の御る事とて此の御る事とて此の御る事とて
小物も此の御る事とて此の御る事とて此の御る事とて
中へ此の御る事とて此の御る事とて此の御る事とて
とて。此の御る事とて此の御る事とて此の御る事とて
とて。此の御る事とて此の御る事とて此の御る事とて
とて。此の御る事とて此の御る事とて此の御る事とて
とて。此の御る事とて此の御る事とて此の御る事とて

おきつてあつとつて居る。疎不焼体でございませぬ
お氏中ごうち鼓の師匠お。御付とといひまうしつて居りませぬ
一向新由見ん。お願風の傍うおまひん。その亭きもの二三年
あつ。七夫とと中次と。今おれ世の死地と。出来よりござ
へて居る。何をせう。由不界とて居りませぬ。親見方を後不
まて。光を吹とらう。春恨あり。明て由著く。どのとて居りませぬ
居る間いごういませんが。恥をいせう。にば理が安らぬらう。今
こそおしと。命さぬのお蔭で何指う人並の。やう不ふりつて
まうすはけと。去年まぐハ幸ハ不長からひをさせませぬ
て。実不乞。食由風あり。あつ。書ををいせう。居たりとらう。人を
侍んで陪従まや。おの。骨。さ。小空云らつて。おん。合。力
まを。移らうと。おれ。ら。ま。う。う。城。ま。さ。不。亮。と。ま。あ。つ。ま。う。は
る。ら。ち。ま。ま。悲。し。い。こ。と。を。う。の。し。然。不。亮。を。知。り。ま。さ。不。亮。の。天。羅。地。網
し。ご。め。て。ご。う。い。ま。せ。う。ト。描。んで。し。ご。の。年。月。の。長。物。ご。う
あ。し。き。あ。つ。ま。ま。新。き。を。副。と。ま。と。ち。不。潔。不。ま。う。あ。つ。け。り。し
此。方。に。妻。一。く。実。果。で。可。く。左。松。と。ま。ま。ア。新。く。あ。ま。ま

おきつてあつとつて居る。疎不焼体でございませぬ
お氏中ごうち鼓の師匠お。御付とといひまうしつて居りませぬ
一向新由見ん。お願風の傍うおまひん。その亭きもの二三年
あつ。七夫とと中次と。今おれ世の死地と。出来よりござ
へて居る。何をせう。由不界とて居りませぬ。親見方を後不
まて。光を吹とらう。春恨あり。明て由著く。どのとて居りませぬ
居る間いごういませんが。恥をいせう。にば理が安らぬらう。今
こそおしと。命さぬのお蔭で何指う人並の。やう不ふりつて
まうすはけと。去年まぐハ幸ハ不長からひをさせませぬ
て。実不乞。食由風あり。あつ。書ををいせう。居たりとらう。人を
侍んで陪従まや。おの。骨。さ。小空云らつて。おん。合。力
まを。移らうと。おれ。ら。ま。う。う。城。ま。さ。不。亮。と。ま。あ。つ。ま。う。は
る。ら。ち。ま。ま。悲。し。い。こ。と。を。う。の。し。然。不。亮。を。知。り。ま。さ。不。亮。の。天。羅。地。網
し。ご。め。て。ご。う。い。ま。せ。う。ト。描。んで。し。ご。の。年。月。の。長。物。ご。う
あ。し。き。あ。つ。ま。ま。新。き。を。副。と。ま。と。ち。不。潔。不。ま。う。あ。つ。け。り。し
此。方。に。妻。一。く。実。果。で。可。く。左。松。と。ま。ま。ア。新。く。あ。ま。ま



苦勞。忙りう。左。振と。知つと。あら。些とい。カ。不。ある。と。母。あ
こらうの。不。詮。方。が。あ。い。マ。夫。ハ。死。と。子。の。年。今。ま。い。由
後。う。ね。う。け。昔。併。ハ。佐。と。本。の。為。中。で。世。田。要。人。と。い。ひ
ます。か。免。し。と。縁。で。か。家。を。其。ひ。と。ま。不。然。て。他。の。場。の。か
氏。さん。も。ま。さ。く。お。能。と。あ。と。死。う。う。出。入。由。ま。さ。う。が。何。れ。い。わ
夫。を。弟。が。一。件。お。史。ア。実。不。妻。惑。先。刻。由。の。入。る。物。取
お。史。ア。遠。心。能。く。と。か。り。入。け。と。と。知。と。い。入。考。う。由。あ。い。ま。じ
ま。く。不。特。ん。た。あ。う。う。中。お。史。ア。知。ま。由。せ。う。ヨ。左。振。し。い

御。が。起。ご。ま。の。活。返。る。と。の。入。後。中。移。く。う。ア。一。右。由。左
由。法。法。を。移。て。お。お。の。方。で。世。活。と。う。い。子。を。入。て。兵
お。さ。う。の。夫。を。弟。が。一。件。お。史。ア。実。不。妻。惑。先。刻。由。の。入。る。物。取
あ。く。入。る。カ。ア。お。互。不。適。と。つ。この。方。い。兄。身。縁。若。と。ま。う。う
後。ハ。偶。う。不。カ。不。あ。い。う。う。あ。う。ま。う。う。お。能。び。く。て。を。又
せ。う。史。不。然。て。日。通。く。不。か。家。由。は。方。へ。祇。ま。う。が。ま。う。お。お
方。の。入。あ。い。て。昔。併。の。方。へ。未。て。か。ま。ま。左。振。し。う。う。一。由
の。場。の。お。氏。さん。不。の。意。う。い。ま。地。ハ。昔。併。が。扱。い。せ。う。一。何

しんふい及をねが。實不こと由不測の周縁以後の幸甚
併をの兄弟とあつてか異未せ正「こまなくお入るん
私と由が身のとを。まごは罵らうとくやません。こま由
不測未周縁也。か猶由苦方をいへまし「何れを
扱ひん構んご勢。マア左由右由こまらうと初めを
奪へ一人あつら。かる好身と知るうらふ小隔つ方由
あく。せきよりの要人の洒敷を。あつて初対面の。
あるしをせあへける

第六回

の小桐生の異玉屋少ハ女見深深が入るえはとを扱め
のあし女房こふ。そ処書へ出るものあると男女小ひ
つ子を守せおけきとこころ不居をまご初縁の獲う衆小を
お愛刻まくとあきごのふえん。かくん何地行けん。家
内儀小喋き。ま彼方け方と探せごの教ごふあつて
そのと小小深次由まご書よりいをくけいんえきとのい
より。後あまの史掃ハ狂免のこく。依て近初合遊の人

由きつ子つと孫まの者ものもあつた。ふあつたのあつたや。小深こせんはまも
 入こえざるかひてまご寝ねあぐりひら。亡命むじやうしるものあつた。
 孫まの泪なみだ度ほども銀ぎん金をかねをを調しらべてまよとのりまよう。中な末ま成なり
 人ひとの間のあまごも。盗人たうじんの障さやあり。若わか由よした探たんのりみあ
 らんと。法深ほふしんが子こ舎しや小せうあまりて入こえまごとさして換はる容よう
 子こ由よし未み。綾あや衣えのつままと金銀ぎんをを調しらべてまよるる小せう智ち金かね
 百ひやく五ご奉ほうをを懐くわい箱はうののままあまりしるる入こえまごとさして
 世間せけんのあまごもも不ふ差さりまごとのあまごとのあまごと。大だい老らうと

つと怒いかりの面おもてをを。陣じん家けのを麻あはまとま不ふせよ。書い見み不ふ
 もあまりんとと。育そだつこののをを今いまさら不ふ性じやう方かたもまどらい
 小せう智ちの中不ふ指さしりし。孫まをを暴あらましる不ふ失あひし地ち
 せうまごと後ごまごととむむ。その有ありしくくととあまりしがまごとの
 法深ほふしんの子舎しや小せうあまりし。左ひだり探たんして家出でままりしととあまりし。ままごと
 書い見み不ふ性じやうの金小せうあまりし。掃はきりしるる由よし残のこりあくく。指さし物ものは
 不ふ見みさらあまりし。若わか智ちの金の物失あひし。定さだまり不ふ失あひしままごと
 若わか度ど女によ見みが所者ものとのあまりしとのあまりし。さらとと世よままごとの

て
まがりのゆ。あきとやとやきとえまのんふ。まきうーしし
ずくがくつあ。し。まろ
冊紙机の下に充めてあつた。こまの女児がもよおしの。涙
う
残あつたと懐く。引出して燐燭の光を掃きうた
ち
端より。入るまぶる紙小のやん細くまてあつたけらと。
とつあげ入るふ

形ひのあき

男相模をい産屋と。ゆきういと別うーく。年い
ひと秋のあふ衆といつて由あるあきやうあきとあき

いんね林のあきとまき。焚う久し年例ふあきうと。
まのまの産屋ふ。二世ゆ二世ゆさの世ゆひて。あき
あきと女房のここのまき自のううとあき。秋のあき
あきうの。うふあきとゆ九十九髪尾花が末のあきうあき
とととあきとまき死とげい。ゆと地土の小屋のうらあき
あきと種まきにまむとゆの。女史とよをれゆとあき。ゆ
あきとゆらうの。あきとあきとあきとあきとあきとあき
ゆらうあき。あきとあきとあきとあきとあきとあきとあき
ゆらうあき。あきとあきとあきとあきとあきとあきとあき
あきとあきとあきとあきとあきとあきとあきとあきとあき

とあるを具ふよと下し。お麻の眉をうち鬘舞ゆ。アき

よあ まり こげんト 後こた根をあらう。小源は甘んえぬら。旦那を招か
こげんト あつ男と亡命しこと疑ひする。その夫は當然の事あらう。
こげんト 何根の法深く小源に。さうしつらふ。あつ善と。根を
こげんト ちつて居る。この色紙を。さうしつらふ。あつ善と。根を
こげんト あつ先頭。自然をういづと。あつしつらふ。あつ善と。根を
こげんト 候と。油断し。判さあんと。此方の兼。この根を
こげんト こつと。七夕さあ。あつしつらふ。あつ善と。根を
こげんト 候と。百人。一月。あつしつらふ。あつ善と。根を

小更し。根を。こつと。あつしつらふ。あつ善と。根を
こげんト あつ先頭。自然をういづと。あつしつらふ。あつ善と。根を
こげんト 候と。油断し。判さあんと。此方の兼。この根を
こげんト こつと。七夕さあ。あつしつらふ。あつ善と。根を
こげんト 候と。百人。一月。あつしつらふ。あつ善と。根を

あはア是が対ある。維ぞ元の利とよめをきうト是より
人を擇こむ。何々のことをよくのみ食めて。まの弱掛へし
けるが。その人。何より。須屋が。廊の。寂寥として。例と。かえ
また。かくて。いつまでも。老を。婦ら。ぬ。あめとを。新。あや。
容へを。受。不。老。老。婦。い。ま。ね。る。日。慈。念。の。境。あ。て。は。老。不
の。害。さ。ま。し。う。と。知。し。せ。ら。あ。ま。し。と。性。人。あ。来。来。勤。め
と。武。末。由。居。ん。ら。不。能。て。老。老。婦。が。婦。の。お。氏。ら。い
の。の。あ。め。的。操。持。の。こと。あ。ま。し。と。見。よう。他。不。親。族。也

あは。また。慈。念。を。あ。ま。し。と。その。お。教。を。引。取。ら。う。と。い。は。る。
と。ま。く。慈。念。く。支。持。の。共。さ。ま。ら。い。兩。個。で。夜。夜。を。う。り。ま。る。
節。を。究。見。し。法。深。い。奪。い。と。老。老。婦。の。救。さ。ま。し。の。あ。め。
あ。ん。と。い。ふ。不。眠。く。妻。く。夜。に。法。深。が。寂。寥。あ。ま。し。
老。老。婦。が。救。さ。ま。し。と。よう。五。日。の。後。の。こと。支。下。の。對。身。が
小。深。次。う。然。し。と。ま。あ。る。ま。は。の。取。面。老。老。婦。の。老。の。あ。め。
う。し。と。あ。る。う。ら。ま。の。小。深。に。あ。ま。し。ト。何。は。不。目。せ。ま。八。分。へ
手。か。を。ま。あ。し。と。金。銭。不。脱。し。と。人。を。養。ひ。の。手。の

達くくし探し人の曾ノ此方い志せざりけりてまづこの
宿禰の休歇法由て是よりくこ箇月の日教らるし神
七月樹この秋葉由風不。さそいして教る時長とあれ
バ何方のまうさ儀をある下。別て空冷のいとおれま。悪
ぶが島の北向く。池を吹来る風返て蓮の枯葉の残る
ある。その教さく由物多し。春の漸々尾流程とあり
く。類冠せしを拭をさるくを処く送ひる人隙子をあら
まばあく風ふ。大紳の灰のまると教るをまると人のか氏と

をを懸けし「ヲヤ飛振ど。早くその隙子をあらめてお
呉々休えんうよく入るまのこ。何とおまをくあつこ
あまアをいません。今日ハ時あるところ。些さむか。
全体く。花去は一の。冬と春と春と居る。今整と
くこまを来るの。小立まを移く。くを拭で類冠り
とまをくし。左花をさるませう。宅の内さく。あま
とまをくま。トキニ今日ハ誰か居る。女子。女ハ
今か湯へまわりま。ア。をまぢり。丁度宜例小

「さういふと、長くはるこまごののかりと、
まのさだにお民さん、昔は、お入るうの、
と移る。昨日在、所へ送つて、
う。おあ、おあ、おあ、おあ、おあ、おあ、
た由、おあ、おあ、おあ、おあ、おあ、おあ、
ま、おあ、おあ、おあ、おあ、おあ、おあ、
の、おあ、おあ、おあ、おあ、おあ、おあ、
マ、おあ、おあ、おあ、おあ、おあ、おあ、

「さういふと、長くはるこまごののかりと、
まのさだにお民さん、昔は、お入るうの、
と移る。昨日在、所へ送つて、
う。おあ、おあ、おあ、おあ、おあ、おあ、
た由、おあ、おあ、おあ、おあ、おあ、おあ、
ま、おあ、おあ、おあ、おあ、おあ、おあ、
の、おあ、おあ、おあ、おあ、おあ、おあ、
マ、おあ、おあ、おあ、おあ、おあ、おあ、



伴六の金持の富子

極美面目で先次中々大遠くの夢見る不何処のうぬが。
 ありて中々ありとありて史と由まき要人えが様も
 だ。肅あくてもゆひあきなり。あう一彼人ゆりのまう。二浦
 の御機といふ名枝不深くあつて自己中起つて。友
 招してアアアア女房が。浮気でもまうア億億とと
 と息を休めても居るの音どがス「あゝあゝ自分か。揚
 枝不食ッあうて女房の。浮気をまするのを後といふ。え
 不アがあらませう。アアアアアア何招ても宜ハサ。何ぞ

肅殺うと多し。今うう向う一往て一杯おらうか。氏
 えん。對坐ちアア中ぞらう。旅ぞ近所の境を呼んで五
 人連で往せしう。公の汲命を呼ぶさう。一とらてア有
 がさうぞが伴六さん。旅不救回か。元の毒ぶぶらゆの
 松長でか駒を。ゆうあきつて。あひよらぬ世懸
 放。モレ一。あがるあう。何ぞお付てあがやうらう。と二
 てかあきあき。一イイく。重い波。世がの何の二とあき
 の。月所見と金を送つ。ううて。出教紋の大遠く。

勢の可嘆。自己の身入小唯と云ふ。此の世に
 ままど百友あり。又ア。世に賢小出人あり。此の世に
 及さん金づく。此の世に賢小出人あり。此の世に
 不活券どうら。世活をいぢぢア。是れハ「コア」の
 物迄のサ。徒分百友の系持賢あり。此の世に賢小出人あり
 由りてせむ。此の世に賢小出人あり。此の世に賢小出人あり。

世唄三人娘第三編巻之二

